

視 点

キカイと言語

玉 村 文 郎

今春、ある書物の刊行に際して驚くことがあった。遅れていた刊行を前に、気ぜわしく校正を進めていたが、出版社の方から、第二校までは何字直してもかまわないという、ありがたい話があったからだ。そんな気ままなことがゆるされるのは、編集のすべてをコンピュータで進めているからということであつた。各所に改行や挿入の朱筆の入つた第二校が、旬日ならずして第三校になり、それから本になるまで一月ばかりしかかからなかつた。キカイはキカイでしかないとおもつていた自分の認識を改める契機になつた。

十数年前のこと、シェークスピアの作品の文体分析をコンピュータで進めた英国の学者が、種々の徴証から見て、ペーコンの文体と著しい類似があると報告して、言語や文体の研究のある分野については、将来コンピュータの活用される日の来ることを予想はしていたが、今やそういう時代になりつつあ

るといのが、目下のいつわらぬ実感である。

その昔、機械翻訳というものが試みられて、英語の「水がほしい」が、ロシア語ではまちがって「酒がほしい」と訳されたとかいうアジな例が紹介され、しよせんキカイはキカイでしかなく、詩の翻訳などではできないものではないという見解がつけられていたのを思い出す。しかし、数年前東京女子大学の水谷静夫氏がコンピュータに作らせた俳句をある雑誌で紹介されたのを見たときは、また認識を改めることになつた。

花明り人の行末つくづくと

古寺に斧こだます寒さかな

春の月人をさがして行きつ来つ

このような句を十二句、わずか〇、〇五秒で作つたという。アジなことをするキカイだ。こんなことが機械にできるなら、今に電算機が可能な句をどんどん打ち出して俳人のお株をうばつてしまふかもしれない。もちろん現在の電算機は、ある語がどんな語とは意味上連接可能で、どんな語とは連接不可能かということ（語の共起関係）については無頓着だ（つまり語義の分析がそこまで精緻になされていない）から、当分は俳句としては認めがたいものまで十七字で打ち出してくるであろう。（しかし、語の共起関係を正確に電算機が覚えこむようになると、

かえって散文的な十七字しか打ち出さないことになろう)

今年は機械と言語との関係に特別な進展があったようだ。日本語ワードプロセッサを採用する自治体がふえ、議事録作りが速く正確になったと報ぜられている。同音語や固有名詞の処理も、あらかじめワープロに略語を記憶させておいて、そのキーをたたただけでいいという。大新聞社もコンピュータによる新聞製作システムを開発して、編集面の大改革を実施した。

高熱・騒音・油やインクの臭いが職場から消えたという。また工業技術院製品科学研究所が「視覚障害者用読書器」を開発したという。本を開くと、文字をコンピュータが認識し、音声合成装置で声に変える仕組みである。今のところ、文字読みと速度は一字あたり約〇、六秒、音声変換は一秒に二字程度で、小学一、二年生が教科書を読むような感じだが、文意は十分理解できるという。さらに、あるメーカーでは、キーやペンの代わりに音声で直接入力して文書作成ができる「音声ワードプロセッサ」の製作に成功したという。このワープロは、特定話者があらかじめ「ア」「イ」「ウ」など六十八種の音を登録しておく、マイクに向かって発音するだけで入力できる仕組みと
か。これまで音声による入力が一番困難視されていたが、そのカベもどうやら突破できたらしい。特定話者の登録された声し

か受けつけないというのは、キカイとしてはやむをえない標準化、規格化であろう。

日進月歩のコンピュータ、ワープロの世界を見ると、キカイに強くない自分でも、この先どこまでキカイが進むのかと好奇心が湧いてくる。誤字・脱字・文のねじれなどの訂正補正、送り仮名・新旧字体の確定といった単純な問題から、校正・編集・文書作成といった構造化・総合作業にいたるまで、キカイが多く代行してくれるようになってきた。言語教育の何分の一かはキカイにまかせる日が来るであろう。古典の現代語訳や漢文の訓読なども、もちろん作品の質にもよろうが、かなりキカイがやってしまうようになろう。キカイは単なるキカイではなくなってきた。

一世紀あまりつづいた文字の大衆化の時代が、キカイによって終わりを告げようとしている。話しことばの復権がワープロによって静かに進んでいくようにおもえる。

しかし、芸術性・創造性については、キカイは中立である。当然のことである。人間にとっての「意味」の世界は、あまりにも深く、あまりにも広い。